

[第11回日本語文化学会発表要旨]

グループオーラルテスト(G-O-T)の開発と実施について

宮 城 徹

(1995.12.9. 発表)

1. 研究目的

コミュニケーション重視の日本語教育の現場においては、妥当性、信頼性のみならず、経済性や実用性も兼ね備えた口頭能力テストが望まれる。そうしたテストの一つの可能性としてグループオーラルテスト（複数の学習者の会話を評価するもの）が考えられるが、研究として報告されたものはまだわずかである。ここでは今回実施したグループオーラルテスト（以下G-O-Tと略す）の開発経過と実施結果の一部について報告する。

2. G-O-Tの特徴

このテストは日本人参加者が二人以上の日本語学習者と同時に同じトピックについて話し、それを会話に参加しない外部評定者（教師）が評定する、というものである。その特徴は以下のとおりである。

- (1) グループ内の日本人対話者の採用 - 接触場面（日本人-学習者）を作り出すことで、テスト場面を現実的な場面に近づけた。
- (2) グループ外評定者の採用 - 評定者をグループから除くことで、不自然さを減らし、評定者（教師）は評定に集中できる。
- (3) 評定項目・基準の開発 - 言語的項目（発話の総量、一発話の長さ、発話の複雑さ、発話の速さ、躊躇、正確さ、発音）と社会言語的項目（言葉の適切さ、ふるまいの適切さ）を設けた。（基準については省略）

3. 実験の概要と結果

学習者は初級から中級レベルの大学生6人（3人×2グループ）。日本人対話者は学習者とは面識のない大学院生。評定者は14人（7人は比較的日本語教育経験のあるもの、残りの7人は日本語教育経験が5ヵ月以内のもの。以下、前者を日本語教育経験のある者、後者をない者と呼ぶ）。

3-1. 日本語教育経験のある評価者とない評価者の印象にもとづく評価

各評定者は学習者のパフォーマンスのビデオを見て、各人の個人的印象（個人的評定基準）に基づいて、学習者の口頭能力の順位をつけた。その結果からケンドールの順位相関をみたところ、教育経験のある評価者とない評価者とは、各グループ内の一致率はあまり高くなく（各々 .55、.66）、後者のほうが一致率が高かった。評価者へのインタビューの結果、その理由として、評価者の個人的評価項目・基準は、受験者の口頭能力の程度や他の受験者との能力差に影響されやすく、安定していないこと、また個人内の基準は、その個人の日本語観によるところが大きく、教育経験が長くなると、その基準が（他の教師と異なろうとも）確固たるものになりがちである、ということが示唆された。

3-2. 日本語教育経験のある評価者とない評価者の評価項目・基準に基づく評価

評価項目・基準の説明、評定の練習を30分程度行なった後、評定者に6人の学習者のパフォーマンスのビデオを見ながら、評定してもらった。

次に各評定をもとに学習者の口頭能力の順位を決め、ケンドールの順位相関をみた。その結果、日本語教育経験のある評価者とあまりない評価者では、前者の一致率が高く（.93）、後者もそれよりは低かったが高い一致率を示した（.81）。従って、今回のテストでは、評価項目・基準に基づく評価が印象に基づく評価よりも適切な評価が下せていたことがわかった。

3-3. ACTFL-OPI との比較

次に同じ学習者に対して、ACTFL-OPI (American Council On The Teaching Foreign Languages-Oral Proficiency Interview)を実施し、その結果をもとにして得た順位と先のG-O-Tの結果の順位を比較した。また参加者（学習者、評定者）の意見聴取によって比較検討の材料とした。

その結果、双方のテスト結果は、必ずしも一致しなかった。それに対しG-O-Tのビデオを観察したACTFL-OPI公認試験官は、各テストで大きく違う口頭能力の側面を示した受験者がいることを指摘した。またACTFL-OPIでは2位に、G-O-Tでは4位に評定された学習者は、インタビューで「G-O-Tでは、どうやってturn-takingを行ったら良いかわからなかった。」と答えた。従ってこの結果は、両テストが学習者の違った側面を測っている可能性を示していると同時に、日本語教育におけるグループ活動およびその評価の必要性を示している。

4. 結論

G-O-T には、メンバー構成によって、一学習者のパフォーマンスが左右される、という問題点があるが、長所としては以下の点が考えられる。

- 1) 比較的効率的に学習者の口頭能力が評価できる。
- 2) インタビューテストと違う口頭能力を延ばし、かつそれを測定できる。
- 3) 日本語教師養成の過程で、研修生に対し、日本人対話者として学習者に接する機会を与えたり、評定者としてのトレーニングにも応用できる。

Skehan (1991)は、グループテストは今後一層開発が望まれる口頭能力試験のひとつであると指摘している。日本語教育においては、口頭能力試験そのものがまだ吟味不十分である。テストは学習の結果をみるだけのものではなく、むしろ学習者や教師に対し次のステップの処方箋を与えるものとして考えることで、コース内での重要性が再認識されるべきである。

〈主な参考文献〉

- Hilsdon, J. (1991) The Group Oral Exam: Advantages and Limitations. in Alderson, C. and North. B. (eds.) *Language Testing in the 1990s. Review of English Language Teaching*. 1,1. London: Modern English Publications in association with the British Council. 189-197.
- Reves, T. (1982) The group-oral examination: A field Experiment. *World Language English*. 1, 4. 259-262.
- Skehan, P. (1991) Progress in Language Testing: the 1990s. in Alderson, C. and North. B. (eds.) *Language Testing in the 1990s. Review of English Language Teaching*. 1,1. London: Modern English Publications in association with the British Council. 3-21.

(メルボルン大学 日本・中国研究学科 講師)